

【研究論文】

福井県における保育実習の現状と課題

石川 昭義

【要約】 福井県における保育実習の受け入れの現状や保育現場の実習に対する考え方について、その全体像を把握するためアンケート調査を実施し、回答のあった140か園を分析・考察の対象とした。園として実習を受け入れることの意義について10項目を設けて尋ねたところ、「とても当てはまる」では「自園の保育者の力量の向上につながる」が一番多かった(35.0%)。一番少なかったのは「実習指導という自園の役割を保護者にアピールする」であった(4.3%)。

実習を受け入れることの負担については、「実習ノートや指導計画を読んで添削したり、所見を書いたりすること」が一番多かった(77.1%)。実習の評価に係る課題では、評価表に不合格を付けることにためらう、実習の評価が大学の評価にどのように影響するかわからない等の意見が多いことが判明した。保育現場からの自由記述やヒアリングでは、養成校との連携を一層強める必要性や実習での新しい学び方を求める意見が多く見られた。

キーワード： 福井県、保育実習、保育現場、養成校、実習の意義

1 はじめに—研究の目的と背景

近年、保育界における保育者不足と早期離職が顕在化しているなかで、保育実習を次代の保育を担う人材育成の脈絡に位置づけ直し、保育職への促進と定着を図ろうという動きが出てきている⁽¹⁾。

こうした現状を受けて、保育者を養成する学校（以下、「養成校」という。）側も保育現場側も、保育実習指導に係る研修会が行われるようになってきているところ⁽²⁾、保育実習のみならず養成教育のあり方全般にわたって、送り出す側（養成校）と受け入れる側（保育現場）との間での共通理解がこれまで以上に求められるところである。

「保育の現場・職業の魅力向上検討会」の報告書（2020年9月30日）では、保育士の職業の魅力発信に係る項目において、次のようなまとめを行っている。

（保育実習の改善に向けた共通研修の開始）

○ 先述のとおり、養成校の卒業生の約15%は企業の一般職等に就職しており、養成校の卒業生に関する令和元年度の調査研究では、卒業して一般職に就いた学生の約4割は、その理由として、「保育所における実習で保育をすることに自信を持てなかったから」と回答している。養成校においては、保育の難しさや保育者として困難なことにぶつかったときに、どのように乗り越えていくのかなど、人間関係をつくっていく力を身につけておくことが必要である。

○ 保育所での実習指導における質の差を改善し、実習等を通じて、保育士としての責任感と使命感を育て、自らの職業にする決意を固めてもらえるように、養成校の団体が実施主体となり、養成校における実習指導に携わる者に対して共通の研修を開始する。国等は、実習が養成校での指導と相まってより効果的になるよう、実習を受け入れる保育所において実習指導の責任者となる保育士への研修を引き続き推進する。養成校と保育所双方の実習指導担当者の共通研修については、一部の地域で行われているが、養成校、地方自治体、保育団体が連携を強化することにより、多くの地域で行われるようにすることが必要である。共通研修を促進する手段として、認定証を発行することも考えられる。（下線は筆者による）

このように、一般職に進路変更する要因の一つに「実習」が挙げられた。養成校にとっても保育現場にとっても、複雑な気持ちとなる指摘となったが、こうして、実習を次代を担う人材育成の脈絡に位置づけて、今以上に、養成校と保育現場との共通研修を行い、さらに自治体や保育団体とも連携して、保育職への着実な就職につなげたい、そして人材を安定して確保したいという思いが強く打ち出されたのである。

仁愛大学子ども教育学科は、平成21（2009）年4月の開設のあと、第1期生が2年生となった平成22（2010）年より毎年、県内施設を中心に保育実習を行ってきている。その間、保育現場からは多くの指導を受け、また反省会等では多くの助言や提案を受けて少しずつ改善を加えながら今日に至っている。しかしながら、これまで、福井県における保育実習の受け入れの現状、あるいは保育現場の実習に対する考え方について、全体像を集約する調査研究は行われてこなかった。そこで、福井県社会福祉協議会主催の「保育実習指導者養成研修」（令和4年3月9日）が行われるのを機にアンケート調査を行うこととした。

《福井県内で保育士資格を取得できる養成校》

現在、福井県内で保育士資格を取得できる養成校は、表1のとおりである。定員ベースで見ると、1年度間に約300人の学生（すべての学年を含む）が県内で保育実習を行っていると推測される。保育現場は、このほかにも中高生の職場体験や看護学生の実習を受け入れていると推察され、年間を通して人材育成に関わる業務が多様に行われている。

表1 福井県内で保育士資格を取得できる養成校（*は指定保育士養成施設）

養成校	学科	取得できる免許・資格
仁愛大学*	人間生活学部子ども教育学科	保育士 小1種 幼1種
仁愛女子短期大学*	幼児教育学科	保育士 幼2種
福井県医療福祉専門学校*	こども・介護学科	保育士 幼2種
大原スポーツ医療保育福祉専門学校		保育士 幼2種
若狭医療福祉専門学校	医療保育科	保育士 幼2種

2 研究の方法

〔アンケート及びヒアリングの実施方法〕

福井県内の保育施設を対象としたアンケート調査を実施した。

Google フォームで作成した質問紙（選択式と自由記述の併用）を福井県健康福祉部子ども家庭課から県内17市町の所管課に依頼状とともに送信し、各所管課から自治体内の各園に送信した。依頼総数は294か園（保育所143、認定こども園142、地域型保育施設9）であり、調査期間は令和4年1月17日（月）～2月10日（木）であった。回答は、園長、教頭、副園長など管理職に依頼した。

次に、アンケート調査の結果を踏まえ、令和4年5月に、県内の施設長2名（公立園1名、私立園1名）にヒアリングを行った。ヒアリングにあたっては、事前に質問項目を通知し、当日はその項目にしたがって、関連する質問を交えながら約45分の聴き取りを行った。

〔倫理的配慮〕

本調査の依頼状の中で、アンケートの趣旨を説明するとともに、3月に行われる福井県社会福祉協議会主催の「保育実習指導者養成研修」で調査結果を発表すること、並びに新たな考察を加えて論集等で発表することがあることを伝えた。また、回答は任意であり強制ではないこと、答えにくい質問には回答しなくてもよいこと、回答はすべて統計的に処理し、自由記述は個人や職場が特定されることのないように取り扱うことを明記した。併せて、回答の返信をもって同意いただいたこととする旨を明記した。

ヒアリングでは、回答は任意であり、答えたくない場合は回答しなくてよいこと、ヒアリングの内容を本研究（論集掲載）をはじめ、関連研究の目的に限って引用すること、また、引用に当たっては、内容をできるだけ一般化し、個人や園が特定されることのないように留意すること、文字起こしのために録音し、録音は文字起こし以外の用途では使用しないことを説明し、文書で同意を得て実施した。

3 アンケート調査の結果と考察

アンケートの回収は、各園より福井県社会福祉協議会に直接送信する方式を採用した。回収数は140か園（回収率47.6%）で、内訳は私立保育所（園）22、公立保育所（園）42、私立認定こども園63、公立認定こども園10、その他3であった。本研究は、この140を分析の対象とした。以下にアンケートの質問項目ごとに結果を示していく。また、自由記述の内容は文意を損ねない程度に一部を省略して“・”で例示する。

Q1 直近の過去3年間で「保育実習」または「教育実習」の受け入れ。

「ある」88.6%（124園）、「ない」11.4%（16園）であった。

Q2 直近の1年間での「保育実習」または「教育実習」の受け入れ。

「保育実習」61.4%（86園）,「教育実習」31.4%（44園）であった。

また,「保育実習」と「教育実習」受け入れの回数及び受け入れ総数は,表2のとおりであった。県内では,実習生の受け入れの機会が多いと考えられ,とりわけ,幼保連携型認定こども園では,科目として「保育実習」と「教育実習」の両方を受け入れている可能性がある。一方で,約1割の園は,直近の3年間で,実習の受け入れが一度もなかった。

表2 保育実習・教育実習の受け入れ回数と受け入れ学生の総数

保育実習	1回 58.1%（50園）	2回 27.9%（24園）	3回 8.1%（7園）
受入総数	1人 55.8%（48園）	2人 24.4%（21園）	3人 8.1%（7園）
教育実習	1回 70.5%（31園）	2回 20.5%（9園）	3回 2.3%（1園）
受入総数	1人 52.3%（23園）	2人 29.5%（13園）	3人 6.8%（3園）

Q3 実習指導方針を明文化しているか。

「明文化している」42.9%,「していない」57.1%であった。

Q4 実習指導担当者を決めているか。

「決めている」74.3%,「決めていない」25.7%であった。

Q5 実習生の配属クラスを決める際に考慮すること。

「できるだけ学生の希望する年齢クラスに配属する」74.3%,「できるだけ経験年数のある保育者のクラスに配属する」10.7%,「できるだけ経験年数の少ない保育者のクラスに配属する」0,「Q4の実習指導担当者のクラスに配属する」0,「その他」15.0%であった。

Q6 実習中に学生に経験してもらいたいと思うこと。

実習中に学生に経験してもらいたいことについて12項目を設け,「必ず経験」「できるだけ経験」「経験しなくてもよい」の3択で回答を求めたところ,図3-1の結果となった。

必ず経験する内容として「子どもといっしょに遊ぶ」はほぼ100%であり,次いで「指導計画案を書いて部分実習を行う」「乳児保育」であり,これらは実習内容の3要素と言えるのではないかと考えられる。「できるだけ経験」を含めれば,「障がいのある子どもの保育」までの8項目は8割～9割が実習内容として望まれていることと言える。

しかし,「保護者とのやりとり」「職員会議に参加」「お便り帳の記載」は,「経験しなくてよい」が約9割を占めた。「園内研修や事例検討会への参加」は,「必ず経験・できるだけ経験」が36%であり,実習における新しい学び方の一つの可能性を示すものと言える。

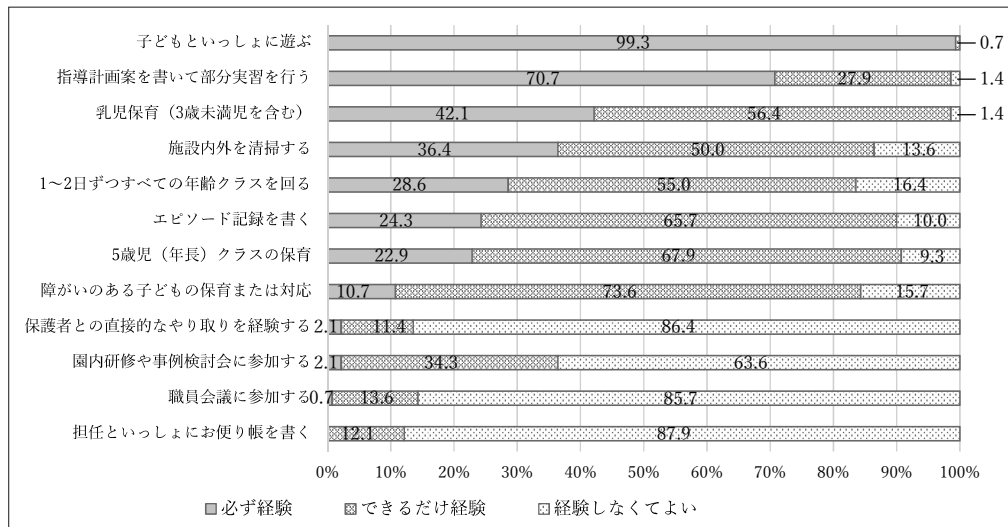


図3-1 実習中に学生に経験してもらいたいと思うこと

Q7. 自園の実習指導で工夫していることはありますか (自由記述).

園での工夫についての主な記述内容をもとに、私見として次の4つにまとめておきたい。

①実習生と職員が話をできる機会を意図的にもつということ。

- ・実習生と多く対話できるように振り返りの時間を持つようにする。また保護者にも実習生が来ていることを伝える。
- ・若い職員との懇談の時間を持つ。
- ・実習生と年齢の近い保育士を担当させるようにしている。相談に乗りやすい、実習生の思いに寄り添いやすいと考えている。また、若手保育士に「先輩」であることを自覚させる効果も大きいと考えている。

②保育の仕事が楽しいと思ってもらえるように心がけているということ。

- ・全員で温かく迎え入れる雰囲気作り。
- ・職員も見られているという意識を持ちながら、また、声掛けしやすい雰囲気を作るように心がけている。保育園の仕事って楽しいと思ってもらえるように心がけている。
- ・良いところや頑張っているところを見つけて言葉を掛け、前向きに取り組めるように配慮している。

③保育士同士の対応を実習生が見たり感じたりできるようにしているということ。

- ・日常の保育に関する職員の振り返りや保護者対応の場にも耳を傾けられる位置で過ごす。
- ・子どもの行動や思い、保育士の対応、保護者対応について、保育士同士が意見を重ね語り合う中で共通理解をはかり、園としての対応や、子どもへの向かい方を探っていく様子を、園の日常の中で見聞きし雰囲気を感じられるようにしている。

④実習生の得意な分野を生かす。

- ・得意分野がある場合、園児の前で披露してもらう。
- ・学生が得意としていることを聞き、その力が発揮できる場面を設ける。

①に関連しては、実習時間内に実習記録あるいはエピソード記録を書く時間を確保し、それをもとに担任との対話（カンファレンス）を行いながら実習生の思いや疑問に対応しているという記述も見られた。また「園児の名前を覚えられるように、いつもは名札をつけていないが、つけるようにしている」という記述も複数見られ、実習を楽しくできるように、あるいはリラックスできるようにとの気づかいがなされている様子がうかがえた。

Q8 クラス担任や実習指導担当者等が参加する園内での反省会（自由記述）。

反省会は、「毎日行っている」「2日に1度」「中間時点と終盤での2回」「終盤や最終日での1回」など、その行われ方は多様であり、参加するメンバーも多様な様子がうかがわれる。「養成校によっては、その担当の先生も参加」という記述も見られた。

特に多かった記述は、部分実習や指導実習の後に行っているというものであり、部分実習に参加した職員から良かった点や反省点をもとに話し合うスタイルがとられている。

現場では反省会の時間の確保に苦慮されていると思われるが、「全職員が参加する職員会議の議題に入れる」ところもあれば、「午睡中に行う」ところもある。

Q9 園側が考える、学生にとっての実習の意義。

学生にとっての実習の意義について園側の捉え方について11項目を設け、「とても当てはまる」から「まったく当てはまらない」までの4択で回答を求めたところ、図3-2の結果となった。

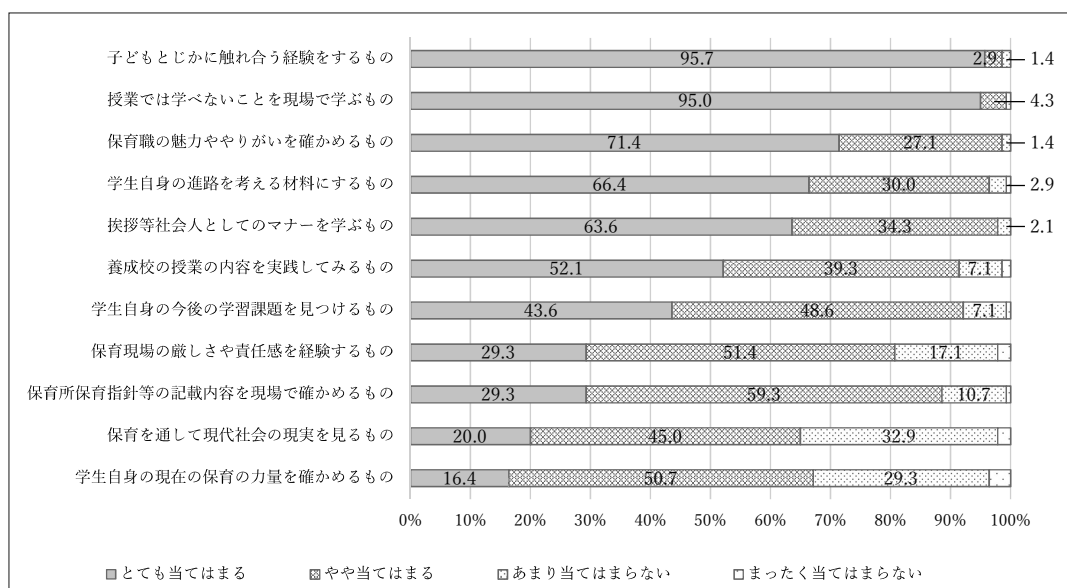


図3-2 園側が考える、学生にとっての実習の意義

「子どもとじかに触れ合う経験」「授業では学べないことを現場で学ぶ」は95%を超え、実習を学校内とは違う特殊な学び方と受け止めている。「やや当てはまる」を含めれば、選択項目の多くが実習の意義として捉えられているようであるが、「保育を通して現代社会の現実を見る」と「学生の力量を確かめる」は当てはまっていない。また、「厳しさや責任感の経験」(29%)よりも「魅力ややりがいを確かめる」(71%)の方が重視されており、保育職に対するポジティブな面を理解してもらいたいという現場の気持ちが表された。

Q10 園として実習を受け入れることの意義.

園として実習を受け入れることの意義について10項目を設け、「とても当てはまる」から「まったく当てはまらない」までの4択で回答を求めたところ、図3-3の結果となった。

「とても当てはまる」は選択肢によって差はあるが、「養成校の指導方針や授業内容を把握する」「実習指導という自園の役割を保護者にアピールする」以外は、7割～9割で実習の意義を受け止めている。

「新規採用者の候補者として学生の力量を見る」は、「とても当てはまる」と「やや当てはまる」で75%の園が認めている。保育現場の偽らざる本音と言えるのではないかと、実習が就職活動の性格を持つかのように変質することも、また逆に学生の側にそのような品定めが行われているかのような印象を与えてしまうことも好ましいとは言えないだろう。

選択肢の中で異質なものが「在学中の実習よりも働きながら経験を積む方が学びの意義が大きい」である。これは意図して設けた選択肢であるが、「とても当てはまる」と「やや当てはまる」で8割の園が認める結果となった。経験知の蓄積とか勘どころを重視する、あたかも職人的な世

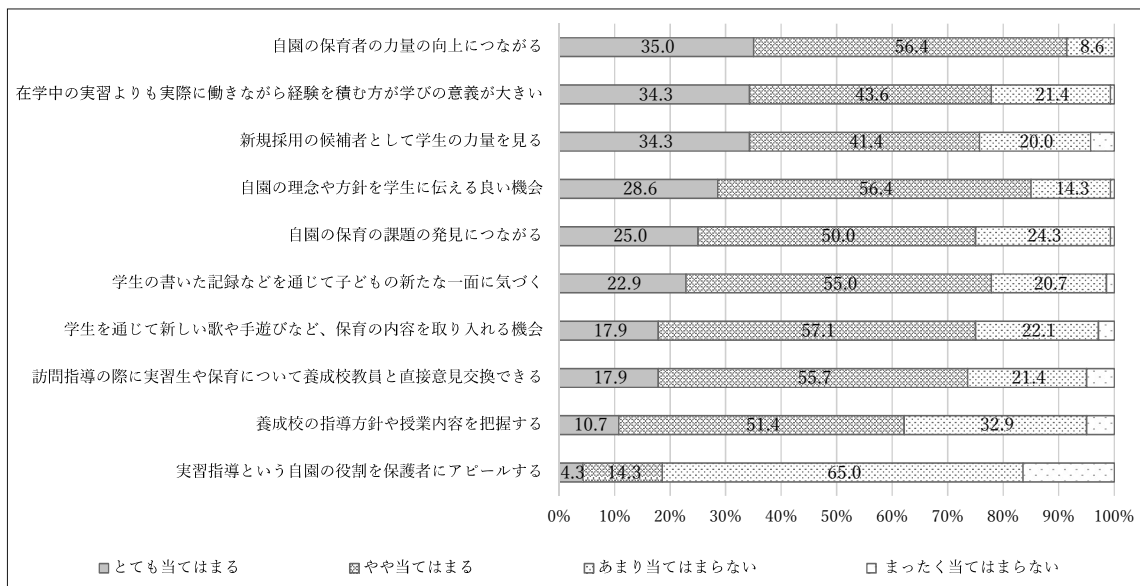


図3-3 園として実習を受け入れることの意義

界の養成像があると思われたところである。

Q11 実習生を受け入れて良かったと思われること（自由記述）。

実習生を受け入れて良かったと思われることについての主な記述内容をもとに、私見として次の3つにまとめておきたい。

①保育を見直すきっかけになるということ。

- ・保育者が実習生との出会いを通して改めて自身の保育を見直すきっかけになることが多い。特に、実習生の疑問や質問内容に答えることで考えるよい機会になっている。
- ・実習を受けることによって、自分たちの保育の振り返りになり、初心に戻ることができる。
- ・実習ノートなどをみることで、毎日の保育を新しい視点からみることができる。
- ・学生が目からみた園の様子を教えてもらうことで不足していることに気付ける。

②保育者の保育力向上につながるということ。

- ・実習生に保育で配慮することや子どもへの接し方を伝える経験をすることで、職員自身の保育力の向上につながっている。
- ・職員もエピソード記録を読ませてもらい、職員の学びにつながった。
- ・保育者が書く実習日誌のコメントから、保育者自身の保育に対する思いや保育観が伝わり、職員同士の理解が深まるきっかけになる。

③新人保育者の教育に役立つということ。

- ・若手保育者は、現場で働く先輩として学生に何か伝えようとする意欲につながる。
- ・採用2～3年目の保育者が実習生を見て、自分の保育に自信をもったり、意欲につながったりした。

この他、実習生が卒園児であったときには、「実習生を通して幼児期の保育の在り方を振り返り」「成長した姿を見て、保育者をやっていたよかったと言える」などの記述が見られた。実習生が自分の母校の学生であったときには、「先輩としての意識向上につながる」ようである。日常とは違う雰囲気を作り出すからであろうか、「園児がクラスに実習生が入ることを喜ぶ」も受け入れの肯定的な側面の一つとなっている。

また、特徴的な記述として、「ねらいをもっている学生に出会い、今後の幼児教育は安泰だなと感じる」という、長期的なスパンでの肯定的な受け止め方も見られた。

Q12 園として、実習を受け入れることの負担（3つ以内回答）。

園として実習を受け入れることの負担について8項目を設け、優先度に応じて3つ以内の選択で回答を求めたところ、図3-4の結果となった。

一番の大きな負担は、「実習ノートや指導計画案を読んで添削したり、所見を書いたりすること」（77.1%）であり、次いで「意欲が乏しい学生の指導を継続すること」（57.1%）であった。意欲が乏しいということに対しては、「資格がほしいだけではないのか」といった苦情を受けること

のないよう、養成校側が事前指導において、学生に明確な実習の目標を自覚させることを徹底する必要があるだろう。

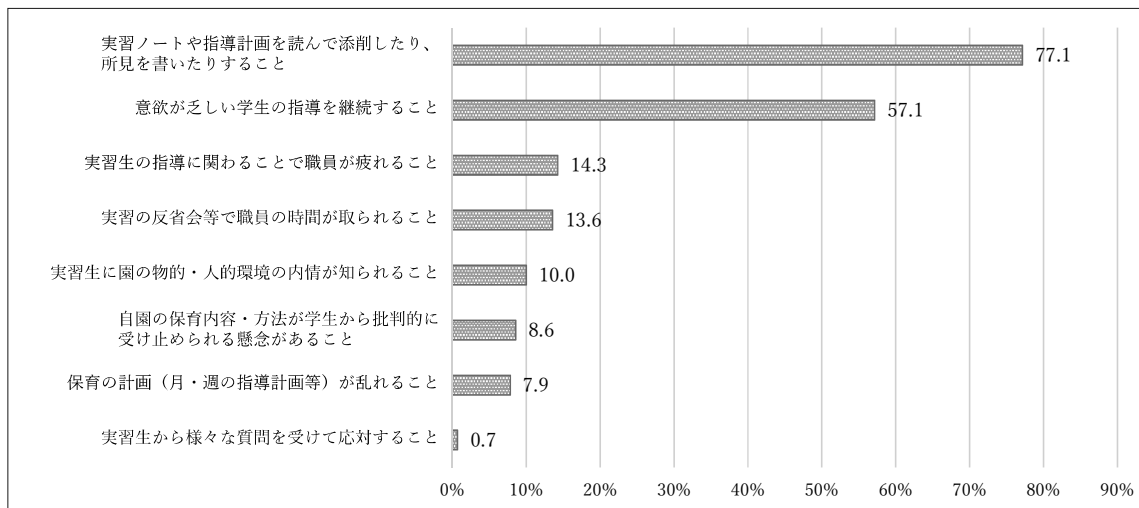


図3-4 園として、実習を受け入れることの負担

Q13 実習を受け入れることの負担（自由記述）。

実習生を受け入れることの負担について、主な記述内容をもとに、私見として次の3つにまとめておきたい。

①コロナ禍について。

- ・コロナ感染症の影響を鑑みながら受け入れに迷う。
- ・コロナ禍の中、保護者に実習生を受け入れていると公表すべきかどうか悩む。

②実習指導の時間確保について。

- ・保育業務が年々増える中で、実習生の指導やフォローにあたる時間の捻出が難しくなっている。
- ・時差出勤を行う中で、時間内での反省会や実習ノートの記述の時間の確保が厳しい。

③学生の安全について。

- ・学生をお預かりしているので、学生自身への安全の確保。

このように、実習の受け入れは身体的、精神的な負担が大きいことが推察される。特にこの2年以上続いているコロナウイルス感染症は、実習受け入れに対しても神経をつかい、いつも以上に緊張を強いられる状況となった。

「挨拶やマナーを一から伝えることも多い」「守秘義務を守れない人がいる」などの記述も見られ、学生の態度が悪ければその負担はさらに大きくなる。「実習生がクラスに入ること、子どもやクラスの様子が変わってしまう」との意見もあり、受け入れのメリットとは逆の受け止め方も見られた。また、「実習記録の様式—大学によっては何を書いてよいかわからない状態で実習

にくる人もいる」との指摘もあり，養成校での事前指導の内容・方法が十分ではないことを示すものもあった。

保育現場としては，本当はこのような様々な負担があるものの「自分たちの学びになるので」という理由で，気持ちのバランスをとって受け入れている様子がうかがわれた。

Q14 実習の評価に係る課題。

実習の評価に係る課題について7項目を設け，「とても当てはまる」から「まったく当てはまらない」までの4択で回答を求めたところ，図3-5の結果となった。

「養成校によって評価表の評価項目が異なる」以外は，いずれの選択肢も半数を超える園が「当てはまる」と回答している。中でも「園側の評価が大学としての実習科目の成績評価にどのように影響するかがわからない」は8割の園が「当てはまる」と回答しており，そのことは「評価表に「不合格」を付けることにためらう」とも無関係ではないと思われる。いずれの選択肢も，養成校と保育現場との間で共通理解が必要なところである。

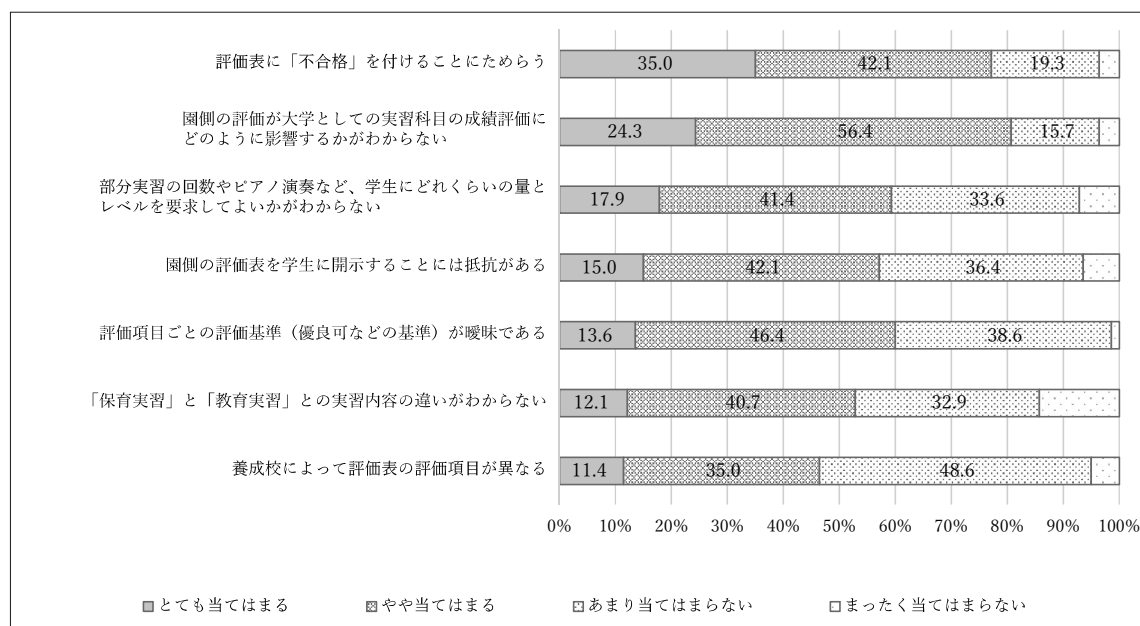


図3-5 実習の評価に係る課題

Q15 実習の評価に係る課題や疑問（自由記述）。

実習の評価に係る課題や疑問についての主な記述内容をもとに，私見として次の3つにまとめておきたい。

①評価の基準について。

- ・何ができていれば「良」なのか，優良可の評価基準がわからない。
- ・1，2回の実習では，実習の評価をつけにくい。

・評価については、様式によっては記入が多く負担に思うことがある。

②養成校での成績について。

- ・短期間での評価が実習生の今後に関わる事。
- ・「不可」になり進級できないのでは…と思い、甘く評価したこともあった。
- ・評価の自由記述欄には、学生さんにあまり不利益なことを書くのは控えてしまう。

③多面的な評価の必要性について。

- ・「不器用でも努力が認められる」「伴奏など技術が高くても幼児に向かう姿勢が…」など、評価はいつも難しいと感じる。
- ・ピアノが苦手でも人格のある人材に価値があると思います。
- ・実習の評価内容が、実習生に「夢」「希望」「意欲」につながる内容のものであると良い。

記述の中には、「実習の評価でありながら、ともに仕事をするならと言う視点で見えてしまうこともあり…」とあった。これは、“自分の園で働くことを想定すると…”の思いが評価の公正さを鈍らせる可能性をうかがわせる指摘であろう。しかし、保育者としての適性を自園に引き寄せることなく、学生の学ぶ姿勢だけを純粹に評価するのはそう簡単ではないと思われる。

Q16 実習記録（日誌、ノート等）のあり方 「A4サイズ2枚程度の分量」を標準とした場合に…。

実習記録（日誌、ノート等）のあり方について、質問では「A4サイズ2枚程度の分量を標準とした場合」と前提を付けて6項目で回答を求めたところ、図3-6の結果となった。

分量について、「A4サイズ2枚」はおおむね肯定的に受け止められている。また、書式としては、エピソード型を取り入れることについて肯定的であり、日によって時系列型かエピソード型を選ぶような自由度のある書式の方がよいのではという意見が多く見られた。

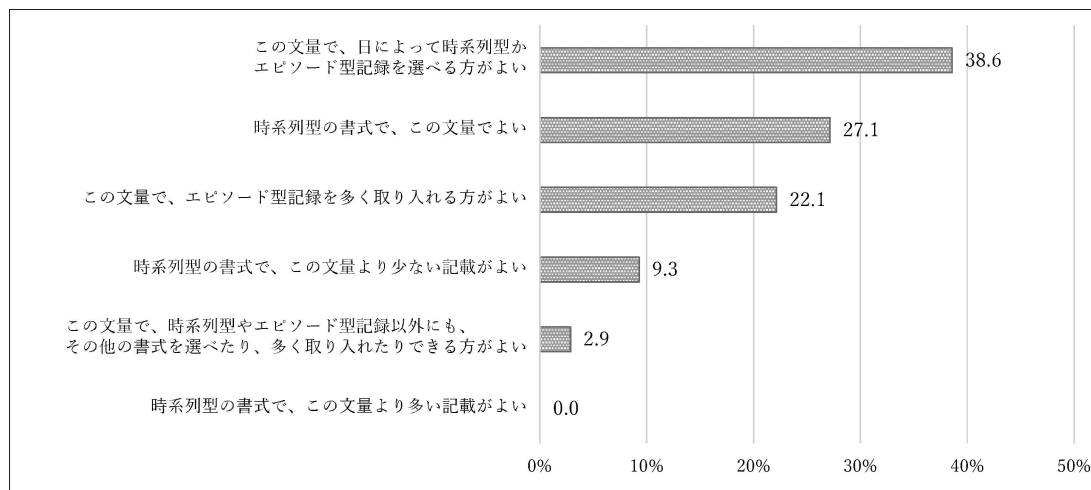


図3-6 実習記録（日誌、ノート等）のあり方

Q17 その他の書式について（自由記述）。

「子どもの遊びの写真を使った，学生が感じた遊びのストーリーを記録する」や「反省というより，学んだことや嬉しかったこと，楽しかったことを中心に振り返ってみるのはどうか」など，旧来の実習記録の概念を崩すような提案が見られた⁽³⁾。

Q18 養成校側の実習指導上の課題だと思われる点（自由記述）。

養成校側の実習指導上の課題について，主な記述内容をもとに，私見として次の3つにまとめておきたい。

①社会人としてのモラルやマナーを身につける。

- ・保育者としての知識だけでなく社会人としてのモラルをもって実習に臨んでほしい。

②事前指導で実習の意義や大切さを十分理解させる。

- ・実習を行う意味や大切さを理解していない場合が時々ある。実習前に十分理解した上で実習を行ってもらいたい。
- ・単位取得のみを目的として来ていると思われる人がいます。実習で何を学びたいのか目的意識をはっきりとし，そのために自分は何をするのかを持たせてください。

③実習日誌（実習ノート）と日案の書き方。

- ・実習ノートで「配慮」「援助」についての書き方に悩んでいるように感じた。書き方見本や使う言葉見本を示し，それを真似て書く経験を積むことで理解しやすくなるのかなと思った。
- ・市町，公立，私立で指導案の違いがあり，ねらい，内容，環境構成，支援などのとらえ方の違いがみられる。

①に関しては定番の指摘とはいえ，電話での言葉づかいや話し方，基本的な文章力，漢字など，いわゆる「心得」に係る記述はかなり多かった。これらは連絡帳など保護者への対応を想定するがゆえの指摘であることは間違いない。「子どもにかかわる人としての基礎能力があってからの実習」「実習生ではありますが日常の保育に参加していただく保育者でもあります」との認識がある一方で，「保育士養成のカリキュラムにはないと思う」「電話や挨拶等，マニュアルがあるような話し方であまり好まない」といった意見も見られた。

4 ヒアリング調査のまとめ

令和4年5月に，福井県内の公立園園長，私立園園長それぞれ1名にヒアリングを実施した。あらかじめ質問項目を送付し，それらを中心に見解をうかがった。ここでは，公立園の施設長を「A園長」，私立園の施設長を「B園長」と表記して，質問項目ごとに内容を紹介する。なお，話し言葉は適宜「である調」に変換し，文意を損ねないように単語や助詞等を補っている。

Q1. これまで実習を受けて，良かったと思ったこと，苦慮したり課題だと思ったりしたこと。

A 園長…実習生と保育者が一緒に保育をすることで、園児についての個性とか、保育の流れの中で今どのように子どもが育っているか、育ってほしいかという願い、そういう保育のねらいや課題を学生にわかるように言葉で伝える力が付いた。それから、実習生の保育を見ることで、自分の保育を見直すきっかけや保育の刺激となった。

モチベーションが低い実習生の指導がなかなか難しい。たとえば、子どもともっと遊べばいいよと言っても、おどおどしながら一緒にただ見ているとか、先生の姿を見ながらまねしてもいいと言っても、動けなかったり、何かぼんやりしていたりする姿があると難しい。

B 園長…単刀直入に言うと、採用につながるということが一番かなと思う。その実習生がどのようなことを考え、どのような人物かというのをこちらもある程度把握できる。

よかったことは、職員の振り返り、気づきがあったこと。もう10年も20年もたっていると、この園でしていることが当たり前になってしまい、初心に返るということをしなくなってしまう。そこで、実習生が来ていろいろな質問を受けると、当たり前のようにしてきたことがそうじゃなかったんだとか、ここは見直すべきだったと、いろいろな問題点が出てきたことはよかった。

Q2. 実習を受け入れて良かったと思うことについての自由記述では、「実習は自園の保育を見直すきっかけになる」「保育者の保育力の向上につながる」という内容がとても多かったが、これらについて具体的な事例。

A 園長…自分がやっている今までの保育の流れの中での実習なので、保育者と実習生は同じ視点で子どもを見ていかなければならないが、やはり自分のクラスの子を客観的に見ることで、こんな仕掛けをしたらこうなるんだとか、自分は気が付かないことでも学生さんがやったりとか、あるいは、ついつい普段の保育の中で自分ではやっちゃっていることでも、実習生の姿を見て、“あっ、こういうときはこういう言葉掛けをしないといけないな”と考える。自分の保育を見直すきっかけというのはそういうことかなと思う。

B 園長…去年までは完全な縦割り保育をしていた。実習生から、年齢別の保育をどのようにしているのかと質問が挙がったことで、例えば生活の面でも横の保育という年齢別の成長の保育というのが、しっかり把握しきれていないことに気付いた。それで縦割り一本ではなくて、年齢別も考えていこうと変わった。

Q3. 実習における経験内容に関する質問の選択肢「園内研修や事例検討会に参加する」は、「必ず経験・できるだけ経験」36%。実際、どのようなやり方ならば学生の参加は可能か。

A 園長…うちの園は終礼のときに共通理解する時間がある。それぞれ、今日この子がこうだったとか、お母さんがこうだったとか、そういう話をする時間がある。今日実習生がこういうことをして、こういう経験をしたとき、子どもがこうだったという話を、プチ園内研修みたいに毎日で

きる。そこに実習生も入って一緒に研修すればいいのではないか。

事例検討会という話になると、かなり個別的な話になって個人情報のことも関係してくるので、よほどのご理解がないと難しい。

B 園長…うちの園ではしていない、というか、できない状態にある。お昼の、子どもが例えば3歳児でしたら、お昼寝している間にクラスでミーティングしたり、その日のいろんな課題とか様子を話し合っている。園内研修とか、資質向上のためのいろいろな勉強はなかなか時間が取れない状況にある。

Q 4. 実習の意義に関する質問の選択肢「保育所保育指針の記載内容を現場で確かめるもの」は「とても当てはまる」は約3割。実際、実習では「指針」の内容をどのように保育現場での学びにつなげていけばよいか。

A 園長…玄関掲示のドキュメンテーションで、子どもたちの写真の姿に合わせて、指針とどこが合っているかを考える機会をつくることで、保育者もわかりやすく理解するし、指針を手軽に手に入る機会にもなっている。だから、そういう場面を実習生とも作れるといい。ここはこういう育ちがあるんだとか、指針のここだよとか、そういう話をするとか何かすらっと入ってくる。学生にカメラを持たせて、ドキュメンテーションを学生と一緒に作ることはできそう。また、人権の尊重ということでは、実習生が来たときに、人権擁護のチェックリストを保育者と一緒にやってみるのもいいと思う。

B 園長…実習ノートの中に、子ども同士が何か言い合っているような場面が出てきた。(学生は)しばらく見ていたら、保育者が来てこういうふうに解決していったという文が書かれていた。それを見て、個人を大事にしている。その子の言い訳とか、その子の主張を聞いている。それでどうしたらよかったのか、どこが駄目だったのかを子どもに気付かせている。その場面を見たときに、ああ、(保育者は)すごいなって思ったという感想が書かれていた。

Q 5. 実習の評価の際に難しいと思われること。また、どのような評価方法が望ましいか。

A 園長…短い期間で園内のみで評価を決めるという責任の重さをすごく感じる。一つ一つの着眼点ごとに評価を付けたほうが、私たちも付けやすいし、実習生も具体的に自分のよかった点と課題となる点が明確にわかって、今後の学習につながっていく。せっかく評価とか、成績表をもらうので、それが自分の今後につながるように何かあるといいのではないか。そして、保育者になろうという自信と意欲につながっていくといい。

B 園長…着眼点がいくつかに分かれている。例えばこれはできているけど、これはできてないという場合に、どのように評価を付けてよいのか。複数の項目ごとに評価があり、最後にそれらの総合評価になっている。総合評価の欄がない評価表もある。アンケートの結果にも意見がたくさんあったとおり、やはり評価は付けにくい。特に悪い評価は付けにくい。

Q 6. 保育実習をより有意義にするために、今後、養成校に望むこと、さらに、保育現場と養成校が協働して行うことが望ましいと思うこと。

A 園長…保育者と、園側と養成校の実習担当の先生とのオリエンテーション。このように話し合う場があると、このような方法もあるかなとか、話しながら出てくる。だから、園と養成校の実習担当の先生のオリエンテーションは、学生だけでなく、最初に、実習が始まる前にあるといいと思う。

やはり園としては、実習生のいいところは何かを見極めたい。やっと来てもらったのだし、保育者の卵だから大事にしなければと、みんな思っている。厳しいことももちろん教えなければいけないが、楽しいところをいっぱい教えるのが私たちの大事な役割。まだプロではないのだし、保育者を目指している、保育者になりたいという本当にキラキラしたその純粋な気持ちを受け止めて、“あ、楽しいな”と少しでも思ってもらいたい。

B 園長…今まさに園側が受け身だという感じがしている。実習生から電話があったら、じゃあ、どうぞという感じで。それでずっと今まで来ていた。もう少し積極的に、園のほうから養成校に対してのアピールがあっていいのかなと思う。学生が実習園を選ぶときに、うちの園はこうしていますというようなアピールや説明が必要かもしれない。

ボランティアでいろんな園に行くことがやはり必要だろう。自分の目で実際に見て、自分に合う園というのを、自分で選んで決めてもらいたいと思う。

今しか知らない実習生だが、私たちが当たり前にしてきた常識が通じないということから、そこから教えていかなければならないということもある。実習生はこれから経験を積んでいくので、経験とか学校で学んだ知識は本当に大事だと思っているが、やはり一番大事なのはその人の人間性だと思っている。子どもと一緒に喜んだり、悲しんだりできるような感性を磨いて、もっともっと人間を磨いてほしいということは保育者にも言っているし、実習生にもそれを学んでほしい。

5 まとめに代えて一福井県における保育実習の課題と展望

(1) 養成校と保育現場との協働

「Q19 次代の保育者の育成に向けて、養成校と保育現場との協働で実習指導をしていくために必要なこと」の自由記述をもとに、私見として次の4つの観点を掲げておきたい。

①養成校と保育現場との話し合い（情報共有）。

・お互いに忙しい日々ですが、養成校へ保育現場の職員が出向いたり、養成校の先生方が施設見学をする機会を作ったり、実習以外にも職員間の交流を多く作り、より良い保育者育成を共に行っていけると良いと思います。

②園内研修への参加。

- ・カンファレンスに養成校と保育現場の担当者が実習生を交えて臨むとよいのではと思います。
- ・現在は、子どもとのかかわりを中心とした実習になっているが、園内研修や職員の話し合いに（学生が）参加する時間があるといいと思う。

③学びの重層化—実習以外での保育現場の経験。

- ・連続して1か月などインターンシップができるとよいのでは。
- ・イベントや行事などの手伝いに学生に来てもらったり、園児が遊びに行く機会を作ってもらなど、普段からお互いにふれあう機会が多くなればと思います。

④保育の魅力伝える、楽しさを共有する。

- ・保育職の魅力・保育者の魅力をともに発信していけるとよい。
- ・保育の難しさよりも楽しさを共有していくこと。
- ・大変さだけではなく、保育の楽しさを感じられる実習についてともに考えていくこと。

①に関連して、双方向の交流や情報交換という意味で、「養成校での様子を見学する」「学校側でどのような学びができているかを把握できると実習に反映できることがあると思われる」などの記述も見られ、養成教育の内容を理解してもらうことの必要性が示唆された。その意味で、子ども教育学科は、隔年で、教育・保育関係者に授業公開を行ってきており、今後もそれを有効に活用していくことが必要であろう。

また、保育現場側からは、「可能な限り養成校の先生に複数回来園していただき、一緒に見守っていけるとよいのではないかと思う」との提案もあった。ヒアリングでは、実習前の養成校とのオリエンテーションや園側からの積極的な情報提供について提案も出された。

このように、様々な機会を通じて、養成校と保育現場との相互理解を進めて、学生・保育現場・養成校がともに学ぼうというお互いの姿勢の中で実習を行えることが望ましい。

④に関しても、ヒアリングでは「楽しいところをいっぱい教えるのが私たちの大事な役割」という見解が示されたように、学生にとって、実習という場で挑戦させてもらったという経験、褒められたという経験はとても重要であり、それを糧に次の学びにつなげて、また実習に行きたくなるように、保育現場・養成校の双方向から働きかけることが必要である。

さらに、保育現場からは、「園側に専門の実習生対応保育者が研修を受けて対応できるようにする」という記述も見られた。現場側、養成校側双方の実習指導担当者に係る研修を今後も進めて、両者の相互理解の厚みを増していかなければならない。

(2) 日常の保育を言語化して学び合う機会

実習生を受け入れることで、保育現場では、日常の保育場面を言語化する機会になると考えられる。すなわち、現場にとっては当たり前に行っていることであっても、実習生からの質問があれば、その理由や背景をきちんと説明することになるであろう。それは、自分の何気ない関わりや援助が言語化されることで改めて自分の保育を振り返る機会にもなるということである。

ヒアリングでは、実習生からの質問を機にこれまでの縦割り保育を一部見直したという話や保育のねらいを伝える力が付いたという話を聞くことができた。このように「言語化する」ことが、また保育者自身の学びにつながるという意味で、実習生と保育者が共に学び合う関係を作っていく機会になると考える。

(3) 養成校の責務

Q18の自由記述には、次のような記述が見られた。

- ・実習は子ども達と過ごして楽しいこともあるけど、仕事としては厳しいこともあるということ、保育者は悩みながら、試行錯誤しながら日々子どもと向き合っていることを是非伝えてください。職員はみんな忙しそうにしていますが、実習生を近い未来、保育者になる仲間として応援していることも伝えてください。
- ・実習でうまくいなくても、現場に立って経験を積んでいくことで克服できることもたくさんあることを伝えていってもらえたら。

このような指摘は、養成校が保育現場と学生をつなぐべく、養成校の責務を示すものであり、実習に係る課題解決の方向性を示すものといえる。

福井県内には保育士の養成に関わる学校が5校ある。それぞれの養成の理念や特色を生かしながらも、県内養成校として、実習の目的や中身の共通化を図り、さらに保育現場との相互理解を進めることを通して、県として安定した保育者の輩出及び定着を図ることが重要だと考える。ヒアリングでは、実習に取り組む学生の姿勢のことや評価表の書式・記載方法について、建設的な意見が出された。このような課題を養成校相互に共有することが必要ではないだろうか。そして、新しい実習スタイル、新しい学び方に向けて、養成校間、あるいは養成校と保育現場が協働してアイデアを出し合い、学生の保育職への志向と理解が深まる実習にしていく必要があると考える。

脚注・引用文献

- (1) たとえば、秋田喜代美・那須信樹編『保育士等キャリアアップ研修テキスト7マネジメント〔第2版〕』（中央法規出版、2020年）において、第4章「人材育成」第3節「保育実習への対応」が設けられている。「現場と養成校の保育実習指導上の乖離を解消していくことは、関係者にとって喫緊の課題であり、改善が求められているところ」（p.100）と述べられている。
- (2) たとえば、養成校教員対象では、全国保育士養成協議会主催「実習指導者認定講習」（令和4年3月23日・24日）、保育現場対象では、日本保育協会主催「保育実習指導者セミナー」（令和3年6月25日・7月2日）が開催されている。
- (3) 令和4年3月6日に開催された日本保育者養成教育学会第6回研究大会でのシンポジウム「保育現場と行政、保育者養成校の連携による保育者養成の可能性」において、池田斗起子氏（世田谷区保育課保育育成支援担当）からは、実習記録を「連絡帳型」にすること、すなわち、連絡帳と同じように、子どもを肯定的に捉える視点から記入する必要性が提案された。

付 記

本稿は、令和3年度保育所等実習指導者研修において、筆者が「保育者養成と保育実習―福井県の保育実習の現状―」と題して話題提供した内容をもとに、自由記述及びヒアリングの分析を追加して再構成したものである。

謝 辞

アンケートの実施にあたり、質問紙の設計には中村学園大学那須信樹教授の助言をいただきました。また、アンケートの配布には福井県社会福祉協議会、福井県健康福祉部子ども家庭課、各自治体の所管課の皆様、基本集計には福井県社会福祉協議会の皆様のお力添えをいただきました。皆様のご協力で大変貴重な情報を収集することができましたこと、ここに記して感謝申し上げます。